

序文

稲垣 和也

2009年3月、『地球研言語記述論集』が発刊し、8本の言語記述にかんする論文が掲載された。その後、今号の第4号にいたるまで毎年刊行をかさね、第2号は10本の論文、第3号は9本の論文、そして今号は8本の論文を掲載した。各号、およそ200ページの厚みをもつ。長田俊樹、大西正幸を中心とする言語記述研究会をベースとして、「言語記述に役立つことは何でもやろう」（第1号序文より）、「そのときどきの研究段階での里程標を残しておく」（第3号序文より）という方針にそって、研究会の運営および論集の刊行が続けられた。そのため、各号に掲載されたすべての論文は、それぞれの言語の記述に役立つ最新の考察をふくんでいる。それらは、主に言語記述研究会 (URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/kijutsuken/index.html>) における意見交換や草稿のレビューをとおして研磨されたものである。第1~3号と同様、今号においても、それぞれの草稿に約2名のメンバーが論評をくわえ、ていねいに改稿し、その最終稿を掲載する、という手続きをとった。

今号には、京都大学文学部4回生の¹大竹昌巳さんの論文が寄せられた。彼は月例の研究会においても、今年度から研究発表をおこなっている。さらに、インダスプロジェクトの言語班のメンバーである、愛知県立大学の²高橋慶治さんの寄稿もある。以下では、今号に掲載した論文や資料等を概観する。各論文のタイトルについては、目次を参照されたい。

高橋慶治さんは、キナウル語研究の第一人者であり、高橋論文の参考文献にはその研究成果の一部が見られる。キナウル語の述部には「時制接辞スロット」があり、そこにテンスやムードの標識が生起する (pp. 1-2)。高橋論文は、これらの機能を、形式を軸にして明快に整理し、主に形態統語論的な記述をおこなったものである。先行研究では、テンスの標識と、テンスをあらわし得る形式が区別されていなかったが (p. 2)、高橋論文は、これらを必要かつ十分に区別しており、今後、テンス体系を議論するための土台になると考えられる。

大竹昌巳さんの論文は、フフホト市出身のダグール語話者から得たデータの共時的な音韻記述と、先行研究をもとにした通時的な音韻記述を展開している。特に、pp. 14-28の共時的記述において、自身の調査した話者に、ダグール語のプトハとハイラルの方言、さらにモンゴル語の影響が見られることを明らかにした。複数の近隣言語・方言に言及しており、視野の広い論文である。稿末の pp. 35-41 には、調査で得たデータの一部である307語と、ダグール語各方言形式・モンゴル語形式との対照表が付されている。

伊藤雄馬さんの論文は、ムラブリ語の音声的変異を体系的に記述することを目的に、予備的な考察をおこなったものである。先行研究の形式をもとに、自身による現地調査で得られたデータを慎重に整理している。話者の発話スタイル、年代差、個人差を考慮した上で、ムラブリ語

の子音，母音，音節タイプの変異を明らかにした (pp. 54–57)。様々な変異を見せる音声を注意深く分析し，ムラブリ語の変異にかんする特徴と，ムラブリ語の記述に必要な項目を示唆した論文である。伊藤論文のデータは4人の調査協力者から得られたもので，これは，変異についてさらに深く追究するには数が少ないが，今後の研究に期待する。

倉部慶太さんの論文は，ジンポー語の概要と民話資料から成る。これまで，ジンポー語の現地調査をもとに，第2号で動詞連続，第3号で対句表現の論文を執筆し，詳細な記述をおこなってきた。そのような詳細な記述をもとに，今号では，コンパクトかつ効果的にジンポー語を通覧している。ジンポー語の系統，類型，地域的特徴をまとめ (pp. 61–66)，その音韻，形態，統語の概要を記述し (pp. 66–91)，その実例として民話テキストを提示した (pp. 92–98)。

仲尾周一郎さんは，南部スーダンのジュバ・アラビア語の現地調査をもとに，第2号で簡易文法とテキスト，第3号でその若年層話者の特徴について論文を執筆した。今号の仲尾論文は，豪州に渡った移民についての社会言語学的な論考である。南部スーダンの諸言語の状況と，それら諸言語の豪州における言語状況がよくわかる。特に，pp. 106–114では，アラビア語変種の中層話体を形態統語論，語彙の面から特徴づけ，この変種があらわれた経緯についても綿密に考察している。

鈴木博之さんの論文は，カムチベット語燕門・斯嘎方言の，音声・音韻，形態統語法の概要を記述したものである。特に，pp. 124–133に見られる音声・音韻の記述には，チベット語の音声・音韻にたいする筆者の深い見識がよくあらわれている。さらに，現地調査で得られた実例から，名詞 (pp. 134–140) と動詞 (pp. 145–156) の形態統語法の詳述し，人称代名詞，指示詞，疑問詞，数詞，助数詞，形容詞，複文についても概観している。鈴木論文は，カムチベット語の全体像を凝縮したものであり，読者がこの言語の特徴をとらえるのに役立つ。

鈴木博之さんと丹珍曲措さんの論文は，広域にわたる現地調査に基づいたものである。カムチベット語の歯茎の摩擦音と破擦音の変異があらわれるための，方言，年代，個人差といった言語外的要因について議論している。さらに，共時的な現象としての摩擦音化に言及するとともに，歯茎摩擦・破擦音の変異を歴史的に考察している。鈴木・丹珍曲措論文は定性的な記述をおこなったものだが，データ収集がすすむとともに，今後は定量的アプローチによる論考が期待されるだろう。

林範彦さんの論文は，条件，理由，時点をあらかず節に見られる意味的な連続性や機能的な重複をあつかっており，一般言語学的にも興味深い。チノ語では，理由，言い換え，条件，継起，時点をあらかず5つの形式があり，これらは，個々に範囲の違いはあるものの，時に条件，理由，時点(および継起)をもカバーする。自身の長年の現地調査から得られたデータをもとに，pp. 167–174では，形式から機能に向けて各形式の基礎的な記述をおこない，pp. 174–182では，逆に，機能から形式に向けて各形式の緻密な生起条件と意味的連続性を明らかにしている。

今号の論集は，大西正幸博士遺暦記念号のため，第1–3号のように大西・稲垣による共同編集という形をとらなかった。大西博士には休んでいただき，不肖ながら稲垣が編集および序文を担当した。大西博士のますますのご活躍をお祈りしたい。(2012年2月6日)